

言語・文化・コミュニケーションと知識創造
—活動型クラスにおける人々の「自己成長」をめぐる—

李曉燕（九州大学大学院比較社会文化研究院）

複数の異なる言語と文化を持つ人々で構成される多文化グループワーク（以下、GW）が教育現場で注目されている。本研究は、2014年後期九州大学の総合科目『知識創造のためのコミュニケーション』の事例研究である。「人はだれしも、この世界とつながろうとして知識を蓄積し、再生産を繰り返しながら環境の変化に対応していく。そのプロセスは知識創造である。知識創造を支えているのはコミュニケーションである」（シラバスによる）。そこで、学習者が自分の将来や職業などを構想し、この世界とつながるにはどのように知識創造をしなければならないかについて議論していくという枠組である。講義の前半5回では知識の観点から「言語」・「文化」・「コミュニケーション」それぞれの概念およびそれらの関係を講述しGWに議論の話題を提供した。6回目から15回まで「言語」、「文化」、「コミュニケーション」および「知識創造」を考えながら、自分の夢を見つけていくよう、グループ活動を各グループに任せた。

今回の『知識創造のためのコミュニケーション』クラスのメンバー22人（日本人学生12人、中国人留学生10人）は四つのグループに分けられた。科目担当教員（筆者）が受講生の了解を得て、最初と最後の授業で実施したアンケート調査、毎回のフィールドノート、および個人レポートをデータとして収集した。科目のキーワードである「言語」、「文化」、「コミュニケーション」および「知識創造」についての受講生一人ひとりの考えの変容、および多文化GWを質的分析し、受講生の「自己成長」を考察する。

言語文化は緊密な関係であり分離不可能であるという認識は各グループで生じているが、言語と文化のそれぞれの役割について認識の変容が見えた。講義の最初は、「言葉というものは不思議なものである。目に見えないものであるのに目に見える形で人に影響を及ぼす」という認識が、「ことばと表情であったり、ことばと身振りであったり、ことばとそれと同時にでてくる声のトーンであったりと、『ことば』は単独では存在していない。むしろことばは「伝える」手段としては弱いものなのかもしれない」と言う見方も生まれた。「知識創造」については、「(言語・文化の) 違いを知ることは、自分の世界を広げ、新たな考えや価値観を生み出すことにもつながる。よって、違ったことばや文化を持った人と話すことで、豊かな考えを持つことができるようになる。それが、さらに、私に知識を与え、個性を生み出す」ことだと認識されるようになった。

異なる文化的バックグラウンドのメンバーたちとの相互作用を通じて、「自己成長」が見られた。「必死に議論に取り組み、また自分自身の考えを私たちに伝えようとする

姿には、毎回圧倒される。その姿はグローバル社会といわれる現代において大切であると思う。私もそれを見習って、もっと外国語の勉強を頑張ろうと思った」。

多文化 GW では、言語能力、自己認識、社会認識、行動規範、帰属感、自己の位置づけなどのセルフ・ナレッジを豊かにすることを、これまでの研究では明らかにした(李, 2014; Li & Umemoto, 2013)。本研究では、多文化 GW のメンバーが異なるセルフ・ナレッジの持ち主との協働によって、参加者らの主体性・協調性・チャレンジ精神などが育まれることがわかった。

参考文献：

李曉燕 (2014) 「多文化グループワークによる暗黙的文化知識の共有—早稲田大学における総合活動型教育を事例に一」『地球社会統合科学』第 21 巻第 1-2 合併号

Li, XiaoYan & Umemoto, Katsuhiko (2013), Knowledge Creation through Inter-Cultural Communication in Multi-Cultural Groupwork, *Intercultural Communication Studies*, 21-1, pp.229-242.